

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集: FXニュースレター

執筆担当: 斎藤登美夫

◆◆◆ No.0886 ◆◆◆

26/04/08

【ドル高基調続くも、「最終盤」との見方は変わらず】

為替市場でドル高の流れが止まらない。3月末に一時160円台を記録したドル/円だけにとどまらず、対ユーロやポンド、NZドルでもドル高傾向が依然として続いている。市場では、中東情勢の混乱を背景とした「有事のドル買い」は、まだ続く予想する向きが少なくないが果たして本当だろうか。2026年も3ヵ月が経過するなか、為替の見通しを再考してみたい。

◎24年は「160円以上で推移が12日間」、定着の有無がポイントに

予想外のタイミングで実施された衆院選で、自民党が歴史的な大勝を収めたこともあり、そののち「高市自民圧勝でやってくる『大・円安相場』」(現代ビジネス)、「高市自民圧勝、いよいよ始まる『円安亡国』」(ヤフー・エキスパート)ーなどといった煽情的な報道がなされていたことを、2月12日付の当レターで取り上げたうえで、筆者は否定的な見解を示している。

確かに、「大幅な円安進行」あるいは「円全面安の流れ」ーにはなっていないという意味では筆者の予想どおりではあるものの、「ドル全面高」の動きから、ここ最近のドル/円はなかなかのドル高・円安が進行していると言わざるを得ない。「昨年安値139.89円起点のドル高は最終盤」だと考えていて筆者の基本姿勢からすれば、やや計算外の動きになる。果たして相場観の修正は必要なのだろうか。

こちらにも以前に報じた内容になるが、2023年以降足もとまでのドル/円相場はというと、ザックリ言ってレンジ取引だ。(下図、ドル/円の月足チャート参照)

その上限は160円レベルであり、しっかり超えてしまうとまさに世界が変わる。ちなみに、前回2024年に160円以上のレベルでドル/円が推移していた日数でさえも12日間に過ぎず、今年160円を超えていた日数はまだたったの3日間。そして連続でもない。(注:4月7日現在)

よって、今回については「しっかり超えた」もしくは「定着した」とはもちろん言えないものの、2024年を参考に160円以上が2週間を超えるような状況を今後たどるとすれば要注意だろう。短期だけにとどまらず、非常に長いスパンで新たなフェーズに入ったと言わざるを得ず、それこそ様々なところで考えをイチから練り直す必要があるだろう。

では、そんな160円以上のレベルに「定着」する可能性は、果たしてどの程度あるのだろうか。もちろん、昨日にも観測されているように一時的に超える展開までは否定できないものの、筆者はそれほど高いとは思っていない。

理由は幾つかあるのだが、もっともわかりやすいものは、当レターで過去に何度も取り上げている「ドルの短期サイクル」で、それによると先でも取り上げたように「昨年安値139.89円起点のドル高は最終盤」にあるといまだ考えていることによる。基本的なスタンスに変化はない。

詳細については、バックナンバーに譲るが、「10-15ヵ月ごとにドルはボトムを付ける」ーという短期波動も139.89円、つまり昨年4月22日を起点にすでに12ヵ月目に入っている。

これからすれば、ドル高も最終盤に入っており、通常であれば上値追いの時間切れが近付きつつあると思われるのだが果たして如何に。

ただし、材料面へと目を転じると、今後ドル安・円高と向かう材料はなんなのが強そうに思えるものがなく、正直判然としない。敢えて言うなら、「中東情勢の早期沈静化」になるのだろうか、あまり強くイメージできていない。

とは言え、過去の経験則から言えることは「ドルは上昇スピードに比べ、下落スピードは2倍程度早い」ーということだ。つまり、本格的な下げに転じるとなれば崩壊的な下落をたどる危険性も孕んでいる。いましばらくはドル高傾向が続く公算が大きいものの、いわゆる「高値掴み」リスクも、そろそろ念頭に置いていただいて損はないのではなかろうか。(了)



